# 防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名　髙　橋　善　貞

**１　視察先　岩手県遠野市**
**２　調査事項　沿岸被災地後方支援**
**３　所感（意見・課題・当町への反映など）**

## はじめに

視察研修のテーマである「中標津町は巨大地震で津波被害を受けた羅臼町・標津町・別海町に対し、後方支援拠点としての役目を果たせるか」について、実際に海の無い遠野市が三陸海岸に面した自治体の後方支援基地として重要な役割を果たしたことから、震災から 13 年を経過した今、遠野市防災担当職員に対し中標津町の「海が無い」「空港がある」「管内の中心都市」の観点から、当時の話を中心に意見交換を行いました。

## １　歴史的な後方支援

明治 29 年「明治三陸地震津波」、昭和８年「昭和三陸地震津波」、昭和 35 年「チリ地震津波」と、約 40 年間隔で繰り返し津波被害が発生し、被災者は遠野市に避難、遠野市は三陸沿岸のまちに支援を行ってきた過去からの歴史があります。

## ２　予想されていた大規模地震

2007 年（平成 19 年）当時、今後 30 年以内に 99％の確率で宮城県沖地震が起きることが報道され、翌年の 2008 年（平成 20 年）には遠野市から国に災害支援基地の整備を要請し、後方支援を想定した参加規模 18000 人の大規模震災対処訓練「みちのく ALERT2008」が実施されました。

その後、2009 年（平成 21 年）に宮城県沖地震の確率は 10 年以内発生が 70％に上昇し、遠野市民の危機意識は高まっていたと感じられます。

## ３　根室管内の場合、危機感はあるのか

根室管内の沿岸３町は「チリ地震」「十勝沖地震」「釧路沖地震」「東方沖地震」など、太平洋沿岸の市町村と違い津波被害の影響が少なく、人命を失う被害は発生していません。

しかし、現在「千島海溝巨大地震」が 2021 年１月から 30 年間で 80％の確率で、マグニチュード７クラスの東日本大震災を上回る規模の地震が予想されています。

さらに中標津町には「標津断層帯」（羅臼町峰浜～羅臼町薫別～標津町古多糠～標津町金山～標津町川北～中標津町武佐～中標津町開陽～中標津町西竹の山岳地帯との

境目）があり、巨大地震が発生した場合、逆断層のために山側で４ｍ以上の隆起が発生する可能性があると予想されていますが、過去のデータが無いために発生する確率（時期）を公表するに至っていません。

## ４　遠野市の後方支援を中標津町が実践できるか

中標津町が遠野市のような「後方支援拠点」として、根室管内沿岸３町の自治体を支援すると仮定して、今回の視察研修で得た支援自治体として必要な要素５点を下記にまとめます。

**①強力なリーダーシップ**

当時の遠野市長（本田市長）は被災時から陣頭指揮をとっており、「食料調達」から「避難所の開設」「支援団体の受け入れ」などに至るまで、即決即断で職員の先頭に立っています。「国に聞かなければわからない」「県に相談しなければ判断できない」などは一切ありませんでした。先頭に立つ首長には絶大な信用と強力なリーダーシップ、精神力が必要と感じました。

**②後方支援は「助けてください」と言われる前に行う**

国・県・遠野市は、支援団体と被災状況を調査し支援に当たることを前提としています。特に後方支援協定は「羅臼町・標津町・別海町が何も言わないのでやらない」と言わずに、中標津町が空港、広域病院、経済中心都市としての自覚があるならば、国・道と協議し一方的（リーダー的立場で）に進めていくべきです。

**③防災訓練は絶対無駄にならない**

国・道・町が共同で行う「総合訓練」は、時代と共に変化していくべきで、特にＩＴ社会は情報収集・情報交換が多様化しています。毎年実施し、その都度時代に合った方法に修正を加えていく事が必要と感じました。連絡手段でさえ、有線電話・衛星電話・携帯電話・携帯メール・PCメール・ＦＡＸ・無線機・トランシーバー等の選択肢があり、特に停電時の対応などは重要な課題と感じました。

**④全ての施設に「公共施設は防災施設」と認識させておく**

指定管理者制度ができてから、行政側から業者側に施設管理、運営が移行していますが、災害時の用途は避難施設です。被災時には支援施設として運営していく事、町長判断で用途を変更できる事を、指定管理者に周知徹底を図る事が重要です。

**⑤法律違反を容認できるか**

遠野市の消防署員が「危険物」についての実態を話してくれました。消防法では灯油の運搬は「危険物取扱者」の資格がなければできませんが、「寒さで凍えている避難所に灯油を運ぶ作業は有資格者に限定することはできなかった。」と言っていました。

また、過去に当町が被災した東方沖地震において、交通止めのバリケードが無く、周囲の立ち木を切って応急のバリケードにする旨の説明をしたとき、「立木の所有者に了解を取るべきだ。」と言った職員を思い出しました。

現在、能登半島の被災地に瓦礫や被災車両などが道路上に散乱しており、それらに所有権はありますが、緊急性を考えると法律は妨げになる事も知るべきと思います。

## ５　後方支援基地　～　遠野市と中標津町の比較

**（基本事項）令和２年度国勢調査**

| | 遠野市 | 中標津町 |
|---|---|---|
| 行政面積 | 826ｋ㎡ | 685ｋ㎡ |
| 人口 | 25,366 人 | 23,010 人 |
| 世帯数 | 9,622 世帯 | 10,577 世帯 |

**（支援団体の拠点施設）**

| | 遠野市運動公園 | 中標津町運動公園 |
|---|---|---|
| 面積 | 29ｈａ | 23.70ｈａ |
| 施設概要 | 野球場（照明付）１面<br>陸上競技場　400mT<br>多目的芝生広場１面<br>テニスコート４面（夜間照明付き） | 野球場（照明無）２面<br>スケートリンク 400mT（照明付）<br>芝生球技場２面（内１面照明付き） |

**（検討課題）**

遠野市運動公園は夜間照明灯があり、ほぼ中標津町運動公園と施設規模は変わりません。

訓練時、実際の支援活動で自衛隊ヘリコプターの離発着が頻繁に行われ、中標津町運動公園でも離発着が可能と思いますが、同公園の横に沿うように北電の高圧線があるため、実際の離発着に支障があるか検討を要します。

また、中標津町運動公園は飲用の「水道水」とスケートリンク用には貯水タンクで「湧水」を使用しており、水道水の供給が断たれた場合、湧水活用が可能な環境にあります。

遠野市運動後援案内看板

遠野市後方支援資料館

## ６　支援物資の受入施設　～　遠野市と中標津町の比較

被災時に急遽支援物資の総合受入施設として活用された「稲荷下屋内運動場」では、全国からの支援物資の「受け入れ」「仕分け」「配送」が行われました。

実際、現地で施設を見ると「中標津町シルバースポーツセンター」と良く似ていますが、遠野市は花崗岩台地の強固な地盤で地震の被害は少ないですが、中標津町は摩周系火山灰が形成した台地に、標津川伏流水の湿地帯・泥炭層がほとんどで、過去の地震（東方沖地震）では、中標津町シルバースポーツセンターはアリーナ部分と外構部分で「液状化現状」の被害がありました。

| | 稲荷下屋内運動場 | シルバースポーツセンター |
|---|---|---|
| 面　　積 | 1,209 ㎡ | 1,489 ㎡ |
| 施設概要 | ゲートボール２面 | ゲートボール２面 |
| 構　　造 | 軽量鉄骨一部木造 | 軽量鉄骨造 |
| 床面構造 | コンクリート床版<br>上部人工芝（人口芝は１回張替） | 砂利路盤上に砂敷設<br>上部人工芝（人工芝の張替無し） |
| 暖房施設 | 窓上部にダクト方式 | 石油ストーブ |
| 建設年次 | １９９７年 | １９８９年 |
| 管理部局 | 教育委員会 | 町民生活部 |

**（検討課題）**

東日本大震災（3.11）発災後の雪が降っている環境下で、支援用の飲料水を屋外に保管しても凍結していませんでした。中標津町シルバースポーツセンターの暖房設備（石油ストーブ）は、直接暖を取るだけのものであり、飲料水は室内外で凍結します。床の構造では遠野市の施設の床版コンクリートに対し、シルバースポーツセンターはいわゆる「土間」であり、直接資材を保管するダンボールは湿気で崩壊します。また、遠野市の屋内運動場には大型シャッターで直接重機が出入りできる構造になっていましたが、地震で段差ができたため、入口から支援物資を搬入することになり、フォークリフトの使用ができなかったとの事でした。中標津町の施設は過去の液状化現象による被害で段差が生じ、被災時の段差解消への対策が必要と思いました。なお、中標津町シルバースポーツセンターは指定避難所に位置付けされ、令和５年度に中標津支援学校と協議協定を結び、中標津支援学校が指定避難所であるシルバースポーツセンターを補完する役割を担う事となっています。

稲荷下屋内運動場

# 防災に関する道外視察研修レポート

議員氏名　髙　橋　善　貞

**１　視察先　岩手県陸前高田市**
**２　調査事項　東日本大震災における消防の活動状況**
**３　所感（意見・課題・当町への反映など）**

**はじめに**

遠野市の後方支援に対し、支援を受けた側で3.11東日本大震災で一番被害が大きかった陸前高田市に視察研修を申し入れました。

当日、対応して頂いた陸前高田市議会及川議長は、仲間である市議会議員を２名失っているし、消防職員、消防団員にもかなりの犠牲者が出て、「逃げる」「助ける」の間で苦悶していたとの事です。

「先日の能登半島地震で13年前の当時を思い出したが、『生きる』事を最優先してほしいと感じた。」との話はとても重みがありました。

また、なぜ海の無い中標津町から津波被災地の陸前高田市に視察研修に訪れたのかは、江口議員から丁重に目的等を説明しましたので、私たちが「物見遊山」で岩手県を訪れていない事は、十分理解して頂いたと思います。

**（基本事項）令和２年度国政調査**

| | 陸前高田市 | 中標津町 |
|---|---|---|
| 行政面積 | 232ｋ㎡ | 685ｋ㎡ |
| 人口 | 18,262人 | 23,010人 |
| 世帯数 | 7,117世帯 | 10,577世帯 |

**（3.11東日本大震災による被害）**

犠牲者数1700人以上（行方不明者含む）、当時人口24246人、被災世帯8000世帯以上で、ほとんどの家屋が全壊になりました。

**１　被災者が被災地で支援活動すること**

最初に消防防災センターで3.11東日本大震災の陸前高田市における津波被害の生々しいＤＶＤによる映像を見ました。

その映像には旧消防庁舎の屋上まで到達した津波と避難している消防職員が映っていて、「これを撮影したのは私です。」との説明には、臨場感以上のものがありました。

津波の惨状を間近に見て精神的に極限状態の避難者を、津波で「生と死」と隣り合

わせにいた人達が「支援活動」を行う。それが当たり前のようにできる陸前高田市の消防署員・消防団員の毅然とした行動は私の想像を超えるものでした。

## ２　「助ける側」と「助けられる側」について

陸前高田市の避難所運営や瓦礫除去について、多くの質問をさせていただきました。

質問には丁寧に回答と説明をいただき、陸前高田市消防職員の対応には大変感謝しています。

「支援する側」「支援される側」で、遠野市の研修の後でもあり、「先ほど後方支援活動で遠野市で視察研修をして来ましたが、避難所等で遠野市の後方支援について感じたことはありますか？」の問いには、「どこからの支援かは全くわからず、記録もしていない。来た支援物資を避難所に届ける作業で精一杯だった。」と正直に言っていただきました。

これが前記の後方支援は「助けてください」と言われる前に行い、特に後方支援協定は「羅臼町・標津町・別海町が何も言わないのでやらない。」と言わずに、中標津町が空港、広域病院、経済中心都市としての自覚があるならば、国・道と協議し一方的（リーダー的立場で）に進めていくべきとの考え方に至りました。

## ３　奇跡の一本松に託す想い

消防防災センターの研修後に猛吹雪で近くまで行けず、車窓から見た「奇跡の一本松」は、当時「1 億 5 千万円もかけてレプリカを作る必要があるのか」と賛否両論がありましたが、近くには道の駅があり、周辺の津波被災地は区画整理された造成地に新しい区画道路が建設されていて、将来に向けて新しい陸前高田市を創造していく想いを感じました。

奇跡の一本松